

2020 年度ソニー幼児教育支援プログラム
保育実践論文

「“おもしろい”
みーつけた!!」
0・1・2 歳児の科学する心



「おはな おはな…
おはな きれいな。」
(1 歳児 H児)

滋賀県彦根市長曾根南町 519-19
企業主導型保育所

保育園「にじのおうち」

目 次

1. はじめに	1
2. ゆるやかな育児担当について	3
3. 研究の方法について	5
4. 0歳児の「“おもしろい” みーつけた!!」	6
「あ” ～～～!!”」透明なカップ	6
5. 1歳児の「“おもしろい” みーつけた!!」	8
雨の日の散歩（事例1）	8
「だんごむし いない!!」（事例2）	11
6. 2歳児の「“おもしろい” みーつけた!!」	14
「みてー！ でんしゃだよ！」（事例1）	14
「ぷかぷか してるねー！」（事例2）	17
7. まとめ	19

1. はじめに

保育園「にじのおうち」は企業主導型保育所として、働く保護者の方の支援と共に地域に根差した保育の提供をめざして昨年の4月に開園、2年目を迎えた。本園は閑静な住宅街の中にある小さな園ではあるが、周辺には桜並木に囲まれた川が流れ、近隣には歩いていける距離にいくつもの公園があり、地域の中でゆったりと自然にも触れながら保育を展開することができる。

園の特徴として、園長はじめ保育に携わる職員は保育士・幼稚園教諭の資格を有し、さらに看護師の存在も含め、自園で調理を行う給食の提供等、子どもたちにとって安心でより良い生活を保障し、一人一人の健やかな成長発達に必要な保育の充実に努めている。

また、0歳児から2歳児までの定員12名という小規模園であり、一人一人に応じた丁寧な保育を行うとともに、自分の家のように落ち着いて生活できる場所であり、また、お迎えに来られた保護者の方がほっと息を抜いて元気に子どもたちに向き合っていただけるように、子どもたちにとっては「もう一つの“おうち”」、保護者の方にとっては「もう一つの“実家”」のような存在になりたいと考えて日々の保育や保護者支援に努めている。

『保育理念』

- 家庭的で穏やかに、安心して生活できる“もうひとつのおうち”。
- 一人ひとり個性の違う子どもたちが、自分らしくのびのびと成長できる。
- 保護者と共に子育てを楽しみ、育ち合える。

ゆるやかな育児担当を実施し、安心できる保育者との愛着関係のもとで、一人一人の発達の姿や生活状況に応じた生活の過ごし方を大事にし、穏やかで落ち着いた環境の中でのびのびと活動できる保育を行う。

一人ひとり、個性の違う子どもたちが、どの子どもも安心して生活する中で自分らしさを発揮することができるとともに、周りの環境に心を動かせ、「やってみたい!」という思いを尊重し、主体となって活動しようとする探求心や好奇心を大切に育てる。

新たな指針の中では乳児や3歳未満児の保育において、“一人一人に應じて”という文言が何度も繰り返されている。本園においても、この新保育指針に則って、0・1・2歳児が発達の状況も生活の様子も一人一人違うということを十分に理解し、尊重することで、一人一人が安心して生活し、自分らしく自分のペースでしっかり育っていくことを大事にして保育を進めている。

「自分の生活の主人公は自分自身」…年齢が小さくても、そんなふうに子どもたちそれぞれが自分に誇りと自信をもって生活できるよう、0歳児から発達の姿に沿って、丁寧にじっくり時間をかけて一人一人が自立していく力を育てる保育を大事にしたいと考えている。

- ・「安定した生活の流れ」（変わらない日課で日々の生活が子ども自身で見通せる）
- ・「一人一人の生活リズムに応じた生活習慣の自立」（一人一人の発達の姿や生活状況に応じた排泄・食事の自立）

大切にしている生活のあり方

さらに、たとえ0歳児の子どもであっても外の世界、自分の周りの世界に興味関心を示し、体全体を使って自らかかわろうとする。そんな子どもたち一人一人の「なんだろう?」「おもしろそう!」という心の動きを丁寧に見取り、一人一人の発達の姿を大切にしながら、ゆっくり時間をかけて遊ぶ（学ぶ）時間や場面、「なんだろう?」「やってみたい」と心が動く環境づくりに努めている。

「にじのうち」の保育環境

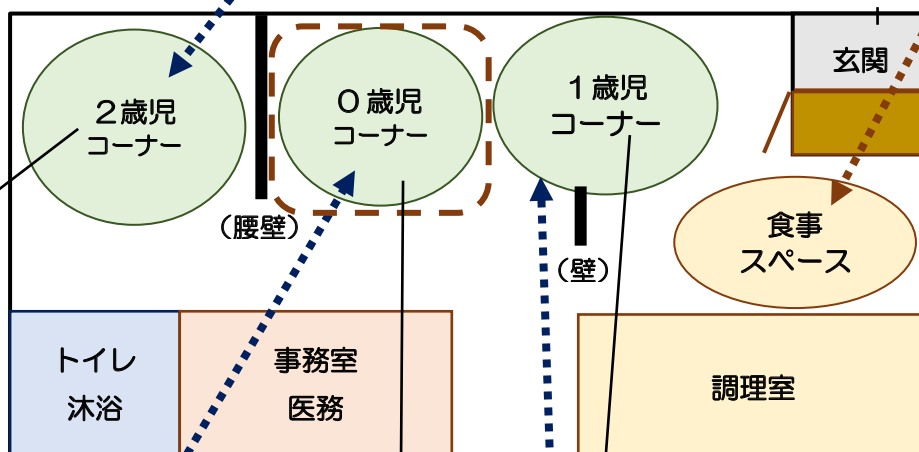
食事コーナー



2歳児コーナー



「～してから～する」…簡単な見通しがもてるようになり、あそびも豊かに発展していく2歳児。“友達のアそびを自分も楽しみたい”…そんな2歳児の願いを保障するための、独立したコーナー。



調理室のオープンな窓で調理師と対話できる食事コーナー。食事の時はサイドテーブルを机の横に置き、介助する保育者がバタバタ動かず、子どもが落ち着いて食事を楽しめるように配慮。

サークルで囲み、安心して過ごせる0歳児コーナー。手指を使ったり、ハイハイしたりくぐったりの身体遊びの他、自分で触ってかかわって…遊びをゆったり楽しむ。サークル越しに1歳児のアそびも見られる。



0歳児コーナー



手指だけでなく道具も上手に使えるようになり言葉も増え、“つもり遊び”を楽しむようになる1歳児。友達と遊びを共有して楽しむ姿も。そこで、あそびによって少し区別し十分にやりたいあそびを楽しめる空間に。



1歳児コーナー

『保育目標』

一人一人の **「自分で！」** を大切に主体となって生活する力を育てる

— “生活の主体は子ども” —

を土台に、

「なんだろう？」「やってみたい！」

挑戦する心や好奇心、探求心を大切に育てる。

思わず「なにかな？」とかかわりたくなる、また「やってみたいな！」と動き出したくなる…そんな子どもたちの心が動き出す環境や生活が周りにあること。

その“かかわりたい（やってみたい）環境”にどんなふうに、どこからかかわるかは子どもたち一人一人の思いや興味によって違うけれど、そこから生まれる「おもしろい！」「わかった！」「できた！」、そして、「もっとやってみたい！」という感動や願いは同じ。

このように、発達や季節など子どもたちの育ちに必要な環境を整えるとともに、生活の様々な場面で一人一人の “自分で！”を尊重し、じっくり時間をかけて寄り添い、“自分でできる”喜びや楽しさを感じられるように援助することを大切にしている。

0・1・2歳児の“科学する心”は…

本園では、たとえ0歳児や1歳児、2歳児といった小さな年齢の子どもたちであっても、一人一人が自分で周りの世界（生活や環境）にかかわり、「なんだろう？」「おもしろそう」に向き合っていく姿を援助していくことが“科学する心”を育てる”ことにつながると考えている。

さらに、0・1・2歳児の“科学する心”とは、一人一人の“おもしろい”みーつけた!!」が始まりと捉え、ゆったり時間をかけながらそれぞれの子どもたちの「みーつけた!!」を共に楽しみ、その“おもしろい”をさらに一層、「もっとおもしろく!!」につなげていけるよう、保育のあり方や環境について研究を深めていきたいと思う。

2. ゆるやかな育児担当について

本園では、生活の中の排泄・食事・睡眠（育児）に関してできるだけ同じ保育士が関わるという担当保育を取り入れている。乳児の生活の中で“生きるために必要”となる部分（育児）を家庭と同じように園でも同じ大人が関わることで、母親や父親以外の大人との愛着を形成し、「お母さん（お父さん）と離れてもこの人（保育者）がいれば大丈夫！」という安心感の中で生活できることを大切にして取り組んでいる。

さらに、本園の担当保育は、基本的に生活の部分（育児）はできるだけ同じ担当保育士が関わるが、あそびにおいては各年齢の担任や保育園全体の職員で遊びを見守り、職員間で情報共有しながら子どもの育ちを支えている。（育児担当保育）

しかし、企業主導型保育所という特性上、週7日間の開園や朝7時から最長では夜10時までという保育時間で保育を行っているため、職員の勤務体制も不規則で育児担当保育を取り入れながらも担当保育士が不在の場合もある。その点を補うため、担当保育士が不在の場合における次の担当を大まかに決めておくことや、関わる大人が変わっても“いつもと変わらない同じ方法”で子どもに関わり、排泄の手伝い、食事の手伝い、睡眠の寄り添いを行うということも大切にしている。おむつを替える手順や食事の介助の仕方などを誰が行ったとしても変わることはないように職員間で共通理解をすることで、子どもたちが戸惑わずいつもと同じように過ごせる、安心してお世話を

してもらえ環境作りが必要と考え、保育の重要な軸となっている。さらに、安心（信頼）できる“大人の存在”である担当保育士を軸にして他の大人への信頼の幅が広がっていきけるような“人とのかかわりの広がり”にも重点をおいている。

また、日々の生活の流れを一定にすることで、子ども自身が「次になにをするのか、なにがあるのか」という事を自分で理解し、見通しをもって生活を送っている。「生活の流れが分かる」と、そして「安心してお世話をしてもらえる大人がいる」ことが合わさって、日々の生活を大人に言われてするのではなく子ども自らが生活を展開する姿が見られる。

例えば、0歳児の生活を見てみると、いつも、朝のおやつを食べた後に戸外での遊びが始まる。そんな生活の過ごし方が分かっているのも、おやつが済むと自ら担当保育士のところへ靴下や帽子を持っていき、戸外へ出る準備を手伝ってほしいと仕草で伝えに来る。食事の場面でも、担当保育士が食事用のエプロン・三角巾をつけて支度を始めると、子どもたちは自分の食事の番だということが分かり、席に着き自分でエプロンをつけて準備し、食事を始めるといった姿が見られる。

保育者自身も育児担当により子どもの発達や体調の変化・心理状況などを把握しやすく、一人一人の子どもの姿に合わせた丁寧な関りができる結果、子どもも身の回りのことや習慣が身につけやすく、自分でわかって安心して生活できることにつながっている。本園では、このように担当保育士との関係を軸にして周りの大人との関係を広げ、子どもが「生活の主体は自分自身！」となるように“ゆるやかな育児担当”を進めている。

0歳児の食事の場面では…



T児が食事をしている間は、おもちゃでゆったり遊んでいたH児。T児の食事が終わり、お昼寝布団に入るのを見ると、さっさとおもちゃを棚に片づけ、「そろそろ、先生は私のことを呼ぶだろうな」というように、生活の場（食事の場所）で自分の給食の準備をする保育士を遊びコーナーから見つめている。「今度は私が食事をする番だ」ということがわかり自分でおもちゃを片づけ、食事へと気持ちを向けている。

体幹が育ち、食事の間中、自分で姿勢を保てるようになるまでは抱っこ食で食事をします。保育士に体を支えてもらいながらも「**食事をするのは私**」（食事をする主体は子ども）を尊重し、子ども自身が自分で口を大きく開け、“あんぐ”とスプーンにのった食事を食べられるように、保育者は子どもの口の前まで食事ののったスプーンを運ぶ。（口の中に一方的に入れ込むことはしない。）

T児の食事が終わり、H児の食事の準備をする保育士

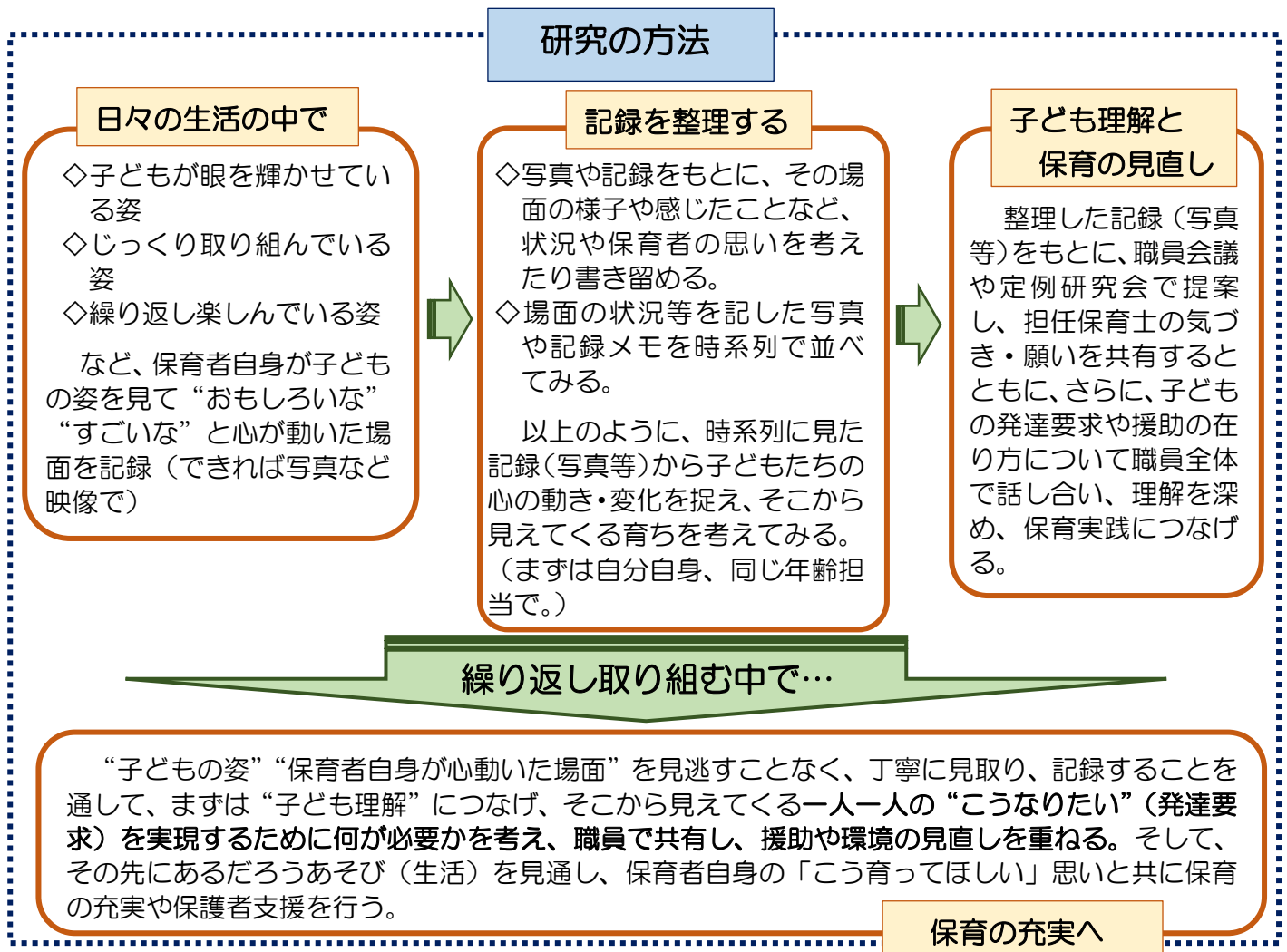


次は「私の番！」保育士が準備する様子見つめるH児。

3. 研究の方法について

小規模園の良さを活かし、一人一人の育ちや取り巻く環境を十分に理解し丁寧な見取りを行うとともに、年齢の発達の様もふまえた保育の充実に向け、職員会議や、研究主任を中心にした定例（毎月１回）の「子ども一人一人を中心に置いた保育の在り方、内容や援助、環境等について語り合い、学び合う研究会」を実施している。

一人一人の子どもに焦点をあて、まずは安心して生活できているか、お気に入りの遊びは何なのか、など、目に見える姿一つ一つを丁寧にひろいあげ、そこから見えてくる「こんなふうにあそびたい」「こんなふうに分でやりたい」という、言わば「大きい自分になりたい」という目には見えない（内面の）“願い”を探るとともに、担任保育士の「こんなふうで育ってほしい」という思い（ねらい）と照らし合わせながら、どんな環境や援助が必要なのかを職員同士で語り合い、一人一人をさらに理解することや環境を見直すなど保育の充実に努めている。



さらに…

子どもたちの生活やあそびの中での姿や、そこに見られる“一人一人の発達の姿”、その姿を保育者や園はどのように捉え、援助しているかなどを写真とコメント（記録）でまとめたドキュメンテーション（ラーニングストーリー）を作成し、保護者にも送迎時に見てもらえるよう玄関に掲示したり、ファイルにまとめていつでも閲覧できるようにしている。保育者自身もドキュメンテーションを作成することで、子どもの姿をさらに深く理解できるとともに、育ちゆく姿を見通す力にしていける。本園での“ドキュメンテーション”は記録と共に、そこに見られる子どもの発達要求や育ちゆく姿を追う“ラーニングストーリー”と捉え、時にはうまくいかずに葛藤しながら乗り越えようとする姿も子どもの育ちにとって大切な場面として保護者にも伝える機会にしている。

4. 0歳児の「“おもしろい” みつけた!!」

「あ” ~~~!!」透明なカップ (R2. 6月、7月)

【6月18日】

0歳児コーナーの「ぽっとんおとし」は透明な海苔の空容器を利用して職員が作ったおもちゃ。子どもたちのお気に入り度で何度も繰り返し“ぽっとん”と棒を蓋の穴から落として遊ぶが、この日は棒を全部出して空になった“ぽっとんおとし”の中をじーっとのぞき込むT児の姿が。

(透明だから向こうが見えておもしろいのかな?) そう考え、保育者も同じようにカップの底の反対側からのぞき込んで一緒に楽しんだ。この“おもしろい”がこの後どんどん広がる。



【7月21日】



“ペキペキ”…音が**おもしろい!**



“みえる!”…**おもしろい!**

タライで水遊びを楽しむT児。透明のカップがお気に入り度、さわったりかじったりを繰り返している。柔らかいカップなので、ぎゅっと握ると“ペキペキ”と鳴る音が楽しくて何度も試すT児。

「あれっ?」そして… 「あ” ~~~!!」



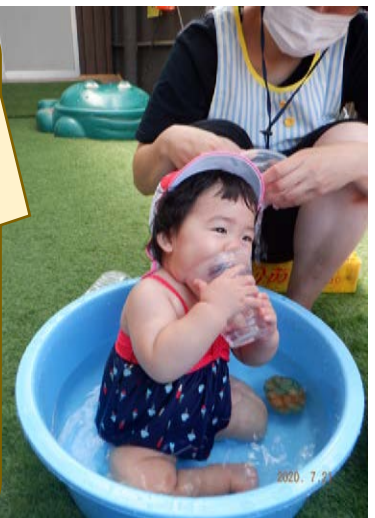
「あれっ?」…かじったりペコペコさせているちに、ふと透明なカップの底から向こう側が透けて見えることに気付いたT児。「“ぽっとんおとし”の時と同じだねえ」そう言葉をかけると、嬉しそうに何度ものぞき込む。のぞき込んで保育者に「見てー!」と言わんばかりの笑顔を繰り返し見せる。そして…

「ぽっとんおとし」で見つけた“不思議”。
「あ! 何か見える!」「なにかな?」という0歳児なりの心が動く**“おもしろい”**の瞬間。この“おもしろい”との出会いが、次々と**新たな“おもしろい”**の出会いにつながっていく。保育者はゆったりとこの“おもしろい”空間を子どもたちと一緒に楽しみ、周りの世界には「もっと知りたい!」「もっとおもしろい!」と思うことがたくさんあって、それを子どもたち一人一人が**“自分で”**確かめ、かかわっていく喜びをいっぱい味あわってほしいと思う。

カップをかじりながら嬉しくて思わず声が出たT児。

「あ” ~~~!!」カップの中でこもった声が響いて**“おもしろい!!”**

カップをぎゅっと口に当てて声を出すとカップごしに手に声の振動が伝わり、何度も何度も「あ” ~~~!!」を楽しむ。



まだまだ“おもしろい”がつながる！

(7月21日の午後)

午睡後、午後のおやつを食べ終わったT児は、おもちゃの棚から“ぽっとなおとし”を取り出し、蓋を一生懸命に引っ張っている。保育者に手伝ってもらって蓋を開けると、すぐに中に入っていた棒を全部外に出して空っぽにした。

繰り返される“おもしろい！”

(朝のあそびの続きをしたいのかな?)
そんなふうに見守っている中、T児は空容器をしっかりと両手で持って、底の向こう側がよく見えるように支えている。何度もぞき込んで嬉しそうに笑い、とうとう、午前のお遊びと同じように、顔を思い切り容器にくっつけて「あ」～～～!!」

容器の中で“こもった声”は少し濁って聞こえ、**おもしろい**。さらにその声は容器に共鳴し、手に振動が伝わるのが不思議で、**さらにおもしろい**のだろう。

数日前、偶然見つけた“おもしろい”(ぽっとなおとしの空容器のあそび)。その後も、水あそびの中で、そして午後のお遊びでも、目の前にある透明な容器に興味を示し、経験したことを繰り返し何度も確かめ、楽しむ姿があった。



そして…



思いっきり
「あ」～～～!!」

【7月22日】

今日も水遊びで透明カップであそぶ0歳児の子どもたち。

カップに水を汲んでは「ジャーッ」を繰り返し、水の感触の心地よさを楽しんでいる。



「あれ？」…
カップがない！

次はかじってみようかな…
そんなふうを持ち上げたカップがスルリと手から水の中に!!

手から落ちた透明カップが水の中に沈んでどんどん見えなくなっていく。目で追えなくなり、とうとう消えてしまった。その瞬間のT児は「あれ？」というより「えっ！」というように心から驚いた様子。この「**なんで?**」の体験が、またいつか出会う「**おもしろい**」につながっていくと考える。



“カップがなくなった!!”
びっくり！不思議で仕方ない様子。



“カップ、ないな…”
水の中に消えたカップが見えなくなって不思議そうに水面を見つめる。

5. 1 歳児の「“おもしろい” みつけた!!」

雨の日の散歩（R2. 7月）（事例 1）

—いつもの道も いつもの景色も 全然違って見えるよ—

毎日、戸外に出て遊んでいる 1 歳児の子どもたち。体を上手く動かせるようになり、活動に活発さが見られるようになってきている。また、同時に言葉の発達も盛んな時期で、「きれいね〜」「つめたいね！」など感じたことや思ったことを言葉で伝える姿も増えつつある。

梅雨の時期に入り雨の日が続くことも多いが、雨上がりの散歩道にできた水たまりを見つけて立ち止まったり、水たまりの中にパシャパシャと入ってみたりと、普段とは違う散歩道の様子に興味津々で遊ぶ姿が見られている。また、雨上がりだけではなく、突然降りだした雨に、空を見上げたり、手の平を上に向けて雨粒がぼつぼつと当たる心地よさをとても嬉しそうに楽しむ姿も見られる。

小雨が降る中…

「雨の中を歩いてみよう！ 雨を全身で感じよう！」というねらいをもって、この日は初めてカッパ（レインコート）を着て外に出てみた。

“おもしろい！”①
玄関前のスロープ。なんか違う！



「いっぱい雨 降ってるね。でもカッパや傘があるから、濡れなくて大丈夫だね。」

玄関から出て思わず「あめ ふってるね〜」というもと違う“お散歩”にちょっぴりワクワクの子どもたち。いつもは駆け下りて外へ飛び出す玄関前のスロープも、そろりそろりとゆっくり歩いて降りていく。歩きなれたいつもの道も、今日は何か違うように感じているのが見て取れる。

“おもしろい！”②
水たまりが大きくなってる！

「おおきいね〜」



いつもの“雨上がりのお散歩”でも見つけては遊ぶ“水たまり”。今日はいつも以上に大きな水たまりになっていることに気付いた子どもたちは「大きいね〜」「ひろいね〜」「お水いっぱい（ある）ね〜」と、口々に保育者に“いつもと違う”を伝えてくる。

保育者も「ほんとやね！ 今日はいっぱいお水があるね！」と子どもたちの“おもしろい！”に共感していく。

子どもたちは早速、見つけた水たまりの中に入ってジャンプ！ 何度も何度も水しぶきをあたりに飛び散らせながら大胆にあそびを楽しむ姿が見られ、しぶきが上がるたびに嬉しくて面白くて思わず笑顔がこぼれる。一緒にジャンプ！ 子どもたち同士、互いに顔を見合わせては“おもしろい！”が**倍増**して、大きな笑い声に変わっていく。

“おもしろい！”③
えっ？ こんなところにもあるよ！



「こっちも～」

他にも水たまりがないか、あちこち探索するR児。
新たに水たまりを見つけると、友達がいる方向に向か
って大きな声で「こっちも～！」と呼び掛けた。

“おもしろい！”④
さっきのより ちいさいねー！



「ちいさいね～」

その声を聞いたH児が駆け寄り、水たまりを確認している。さっきの水たまりと比べて「ちいさいね～」とH児。次々と他の子どもたちも集まってきた姿を見て、R児は満足そうにますます嬉しい顔を見せる。

R児「こっちも～」
S児「あった～！」

その後も探索しながら水たまりを見つけては
大きな声で「こっちも～！」「あった～！」と
互いに知らせ合っている。はじめはR児一人が
始めた“水たまりさがし”がいつの間にか友達
と一緒に活動へと広がっていった。

“おもしろい”がどんどん
みつかるとよ！⑤



考 察

今回は“目的の場所”を決めた散歩ではなく、普段から毎日のように歩いている散歩道の様子の違いを感じてほしいという願いのもと、探索活動をたっぷり楽しむことを目的に出かけた。普段から子どもたちの歩くペースに合わせ、ゆったりとした散歩を楽しむことを大切にしているが、これまで以上に、まわりの様子やその変化に、保育者が先に先にと情報を知らせたり先回りをするのではないよう、子どもたちがみつける“おもしろい”を思う存分に楽しむことができるようにじっくりと見守り、共に楽しむことを大事にかかわっていった。そうすることで、子どもたちはそれぞれ、たっぷりと探索活動を楽しみ自分で見つけたこと・ものを次々と指さしや言葉で知らせるなど、自分の“おもしろい”を周りの大人や友達に「教えたい！」「伝えたい！」という思いへと広がっていったと考える。

- ①玄関を出た瞬間に「えっ？いつもと違う！」…スロープは、そろりそろり ゆっくり歩く
- ②雨上がりにいつも見かける「水たまり」が大きくなって！…思いっきり ジャンプ！！
- ③いつもはないところに「こっちにも（水たまり）ある！」…見つけたことを伝えたい
- ④あっちの水たまりより「ちいさいねー！」…ふたつの水たまりを比べっこ
- ⑤「こっちも！」「あっちも！」…“おもしろい”がどんどん広がっていく

この“おもしろい”の広がりが1歳児の「科学する心」の始まりであり、さらに深まりにつながると考える。

乳児期においては生まれて初めて体験することがたくさんある。しかし、大人の価値観や考えで「雨だから外には行けない」「まだ小さいからできない（わからない）」などと決めつけてしまうと、子どもたちが周りの世界の不思議に出会い、自らかかわって様々なことを体験したり学ぶ機会を奪ってしまうのではないかと考える。安全面や衛生面には十分に配慮しながらも、まずは子どもたち自身が“自分で”やってみる、確かめてみるといった体験を通して、自分の知らなかった世界を知ってほしいと願う。そして、その中で、感触や温度の違いを感じたり、においを嗅いでみたりなど、五感をつかってあそびを十分に楽しむことを大切にしたいと思う。そんな、一人一人の子どもたちの“自分で”やってみる経験の積み重ねが、また新たな“おもしろい”に出会うことになり、子どもたちの発達していく過程とも相まって、「なんだろう?」「なんでかな?」「たしかめてみたい」といった“科学する心を育てる”ことにつながっていくのではないかと考える。

雨のお散歩から帰って…

お散歩から帰って軒下で一休みしようと思っていると、さっさと玄関に向かうR児の姿が…

（ずぼんが濡れたから気持ちが悪いのかな？）
そんなふうに思いながらR児の姿を目で追っていると、
玄関に座り、長靴を自分で脱ごうと何やら頑張っている。
（自分でやりたいんだな）…そう考え、しばらく見守ることに。

なんだか、いつもの
長靴と違うよ
“おもしろい”

「長靴、ぬげた！」

「どうなってる
のかな？」

ジャー—ツ!!
“おもしろい!!”



長靴の中をじっとのぞき込んで何かを確認しているよう…

そして長靴を逆さにして…ジャー—ツ。たくさん水が出てきて、ここで、満足そうに長靴を担任に渡すR児。「ジャーって、たくさんお水が出てきたね。」R児の“おもしろい”を共感。

あそびや生活の様々な場面で“おもしろい”と出会い、「なんだろう?」と心動かせ“自分で”確かめようと行動する0・1・2歳児。子どもたちを取り巻く世界には“不思議”があふれ、その「不思議の正体」を自分で確かめたい」と動き出す姿を保育者はしっかり見取り、一人一人が“自分で”かかわる姿を、まずはゆったりと“待つ”（見守る）ことが必要だと実感した。

「だんごむし いない!!」(R2.7月) (事例2)

【7月22日】

雨上がりの中、「お散歩へ行こう!」と外へ。靴を履いて一番に玄関先にやってきたRk児。みんなが出てくるまでに見ておきたいものがあったのか、一目散に園舎横の花壇に走っていく。

「あれ～、いない!」(心が動く**“おもしろい”**)…そう言うと、踵を返して「みさとさーん、だんごむし、いないー!」(本園では“もうひとつのお家”と考えており、保育士を先生とは呼ばず名前前で呼ぶ。)と知らせに行った。

以前、たくさんのダンゴムシを見つけた場所、花壇。お散歩前にちょっと見てみよう、大好きなダンゴムシを探しにいったけれど、どういうわけか一匹もいない。そばにいた別の保育士も一緒に探す、どこにもいない。Rk児にとって大変な事件だったのだろう。担任の“みさとさん”に大急ぎで知らせに行ったのである。

「ほんまやなあ。どこに行ったんやろ?」…他の1歳児たちもやってきて一緒に地面をのぞき込む。「いないねー」…雨が降る前はいっぱいいたダンゴムシはどこにいったのかな? (“不思議”という**“おもしろい”**に出会う。)

怪訝そうに地面を見つめる子どもたちの姿に、そばに置いてあった大きな箱をずらしてみると…

「ほんまや。いないな…」



「みて! だんごむし。」



“自分で”が大きく膨らむ1歳児。自分でダンゴムシを見つけたことを誇らしげに見せてくれる思いをしっかり受け止めたい。

「いた～! だんごむしいたよ」

考 察

“この前、ここにいっぱい(ダンゴムシ)いたな”そんなふうに見通しをもって行動したRk児。このRk児の姿は歩行も確立し、周りの世界への興味や関心も広がったことで、探索活動も活発になってきた1歳児らしい姿だと捉えられる。

雨が降って大きな箱の下に移動したと考えられるダンゴムシ。この“いつもと違う”ダンゴムシの様子に子どもたちの心は「だんごむし いない!」と動く(**“おもしろい”**)。箱を動かしたことで下に隠れていたことがわかった子どもたちは、「だんごむし いたー!」と見つけた嬉しさを友達と共有している。安心できる存在、保育士の支えはまだまだ必要だけれど、言葉も増え、人との関りも増えていくことで“人と気持ちを共有するようになる”1歳児らしい姿が見られた事例だと考える。



お散歩に出かけて…

その後、ダンゴムシを見つけてほっとした子どもたちは、元気よくいつもの公園まで散歩に出かけた。この公園にはブランコやすべり台など、子どもたちの大好きな遊具があるのだが、この日は、公園に着くと公園の周辺にある木々やフェンスの根本のところをめぐって走っていく。



木の根本やフェンスの地面のところへやってきた子どもたちは、すかさず石や木の葉をどけてダンゴムシを探し始めた。一つ一つ石や葉っぱをどけてはじっくり地面の様子を見ている。2歳児が見つけたダンゴムシも、動き出す様子をそばで一緒にじーっと見つめている。

ダンゴムシはきっと「何かの下にかくれているはず！」期待でいっぱいの子どもたち。（“**おもしろい**”が深まっていく）この子どもたちの姿には経験したことから少しずつ見通す力も芽生えてきていると考える。



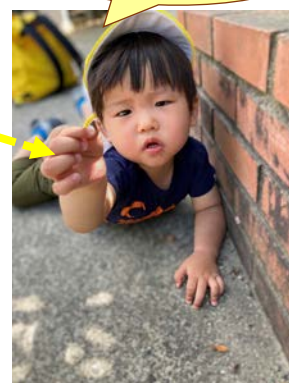
小石や木の葉、地面の上にある自然物に隠れるように生息しているたくさんの生物。ダンゴムシだけでなく、小さな虫が動く姿に心動かされ（“**おもしろい**”）、興味津々の子どもたちは、「ここにもいるかな?」「ここはどうか?」というように、様々な場所に座り込んで探していく。（“**おもしろい**”が広がっていく。）



すべり台の上まで登ったところに何かいる！
こんなところに大きな虫がいることにびっくり。



なんか、動いてるよ！



「みつけたー！」

カブトムシさん おいで… (8月)



「なにしてるの？」
H児も加わって…



突然、立ち上がった
R児、思いっきり脚
を広げてカブトムシ
の前に立ちはだかつ
た。

0歳児の頃から遊
びの中で、木製のトン
ネルをくぐって遊ん
でいたことや、電車を
レールの上で走らせ
たりトンネルをくぐ
らせたりして遊んで
いる子どもたち。自分
が楽しかった“あそ
び”をカブトムシにも
してあげているよう
だ。



「Hちゃんも！」
(二人でトンネル)

R児もH児も、カブトムシの様子をじ
っと見て、ゆっくり歩くカブトムシの歩
調に合わせて脚の開き具合を変えている。
いつも自分が遊ぶ時に保育士からして
もらっているように、カブトムシの動きに
あわせている。



考 察

1歳児の子どもたちにとって自然の物・環境には心が動く
“おもしろい”がたくさんある。特に虫など生き物は、見た
目のおもしろさや動きのおもしろさ、不思議さに心が奪わ
れ、“自分から”かかわっていかこうとする姿が見られる。

大好きな虫といっぱい出会い、かかわって遊ぶ中で、1歳
児という小さな年齢であっても、自分が大人から大切に關わ
ってもらっているのと同じように生き物に優しく触れる姿
に保育者自身も驚かされる。子どもたちの心が動く“自然”、
たくさん触れて遊ぶ時間を大事に保育を進めたいと考える。



「うごいてるね！」
とっても嬉しいH児。

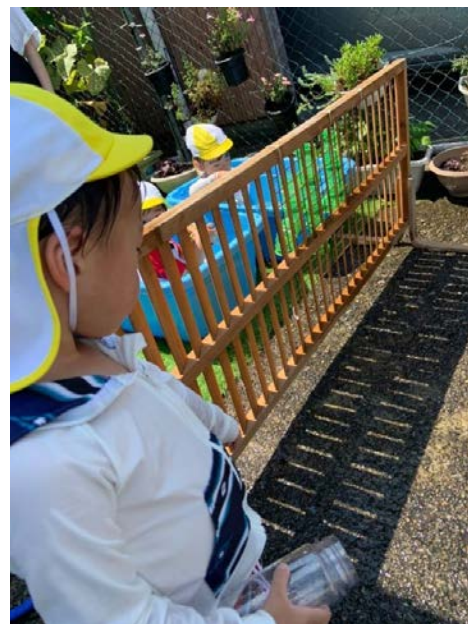
6. 2歳児の「“おもしろい” みーつけた!!」

「みてー！ でんしゃだよ！」(R2. 7月) (事例1)

園舎横の屋根付きテラスは砂遊びや水あそびなど戸外遊びの場所として保育の中で使用している。生活道路に面しているため、安全対策として、このテラスで遊ぶ時は柵（ラティス）を置いて子どもたちが道路へ飛び出して危険に会うことのないようにしている。

この日も、プールあそびの横に安全用柵（ラティス）を置いていたのだが…

「みてー！ みてー！ でんしゃだよー!!」(“おもしろい”) S児の声に驚いて振り向くと、地面にできたラティスの柵の影を指さして一生懸命に「でんしゃー!!」と知らせている。偶然に見つけた柵の影は見たことがある「でんしゃ（の線路）」にそっくり。普段はなかなか自分の思いを言葉にして伝えることが少ないS児が、今、見つけた“おもしろい”をみんなに伝えたくて大きな声で知らせている。



「でんしゃ
でんしゃ のるーっ。」

「でんしゃにのって どこかにおでかけですか〜?」…S児の生き生きとした表情に保育者も嬉しくなって、そう言葉をかけると、

「おかいもん（お買い物） おかいもん！」

「ラーメン かいにいくのー。」

地面にできた「線路」の上を確かめるようにゆっくり進みながら嬉しそうに答えてくれたS児。そんなS児のことばを聞いた他の子どもたちも集まってきて…

Sm「どこにでんしゃ あるん？」

A「どこにおかいものいくの〜？」

Sh「Shも でんしゃ したいーっ。」

「みてー。でんしゃだよ。」

S児に教えてもらった子どもたちは、

Sh「ほんまや、でんしゃや！ Shものるー」

Sm「ねーねー みてー！ でんしゃよー。」

違う場所にいた保育士にも知らせるSm児。



地面に映ったラティス柵の影の模様が、まるで“でんしゃ（の線路）”のように見えたS児の“**おもしろい**”。そんなS児の“おもしろい”が他の子どもたちにも広がり、「でんしゃあそび」に発展していく。友達が見つけた“いいこと”（おもしろい）と一緒にやりたい、同じあそびを楽しみたい…そんな2歳児らしい姿が見て取れる。



「ゴシゴシするのよー。」

「ねーねー でんしゃよー！」と自分ごとのように喜んだSm児の持っていたペットボトルから水が“でんしゃ”（線路）の上にこぼれてしまった。

その様子を見たN児が、持っていたカップでゴシゴシと“でんしゃ”（線路）を洗い出した！

N児がゴシゴシと“でんしゃ”を洗い出したのを見たSm児、A児が「おみず、もってきたよー！」とどんどん水を運んでくる。

最初はSm児がこぼした水を拭くつもりだったと予想されるN児の行動から他の子どもたちもあそびに加わり「でんしゃ洗い」に。

すると…

何か気になるのか、Sm児がもう一つある柵の周りをぐるぐると歩き始めた。

「ないなー…。」

「でんしゃ ないやん…」（“不思議”という“**おもしろい**”の出会い）

その言葉に、まわりの子どもたちも集まってきた。

みんなでしばらくキョロキョロと柵の周辺を探すけど、どこにも“でんしゃ”が見当たらない。

「あゆみさーん（担当保育士）、（こっちは）でんしゃ ないよー」とSh児。

「どこにあるん？」とSm児。



「でんしゃ ない！」

柵の周囲で、上や下をのぞき込んで“でんしゃ”を探す2歳児の子どもたち。S児の“おもしろい”から始まったみんなの「でんしゃあそび」。日の当たる場所でしか現れない「影」が作り出すこの“不思議”に、子どもたちの“**おもしろい**”はどんどん膨らんでいく。



「でんしゃ
どこにいったん？」



ないねー
ないねー…

子どもたちの「なんで、電車がないの？」（“不思議” という **“おもしろい”**）の声に、このラティスの柵を少し、日の当たる場所にずらしてみた。

すると…

Sm・Sh「あーっ！ でんしゃ でてきたー!!」

S「でてきたー！」（**“おもしろい”**）

手足で確かめながら

Sm「あったや〜ん。」

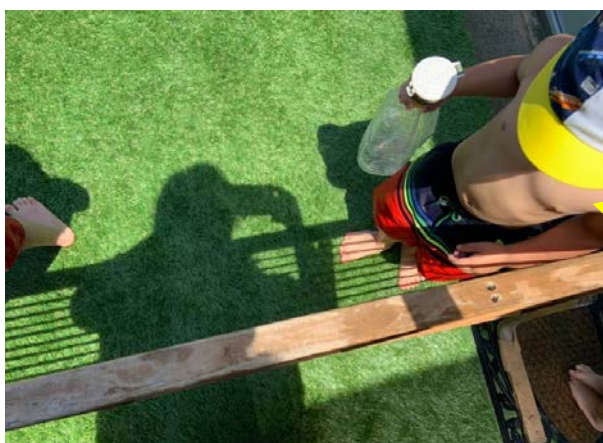
Sh「のろうよ〜。」



あれ？ なんかちがう…

できた“でんしゃ”（影）に大喜びしていたが、ふと、影の形に目をやったSm児が、**“あれ？”**という顔をして「さっきとちがうで！」（**“おもしろい”**）

Sh児も「ほんまや。でんしゃ ちがう！」



しばらく“影”を見つめていたSm児。
「これ、やく（焼く）やつやん！」
「バーベキューでお肉とかを焼いたりする、あの“焼くやつ”！？」…Sm児のことはを受けて問うと
「そう！ Sm、なんかやく（焼く）わ！」

ラティスの柵の影を見つけ、「電車（線路）」に見立てて遊び始めた子どもたち。日陰にある柵には“影”がないことに気付く。保育士が日の当たる方へ少し動かすことで現れた新たな“影”。それはまた形の違うものだった。その“形”からイメージを膨らませ、家で経験して知っている「バーベキューの網」に見立てて新たなあそびが続いていく。

「なんで？」「これなに？」と周りの世界の出来事にさらに心が動き自分で確かめようとしたり、「さっきと違う！」と比べて見る力も育ってきたと感じる。（2歳児らしい姿）



“日向と影”、その後も…（8月）

泡あそびを楽しんでいた A 児。
ふと顔をあげ、周りを見回している。

そして…おもむろに泡水の入ったタライを押し始めた。
驚いてどうしたのか尋ねると
「ここが あついの」…首の後ろ側を触って教えてくれた。

そう言いながら、自分でずんずんと日影までタライを押ししていく。

「よしっ!!」

と、納得したら、次は使っていた道具を取りに行き、

「ここは すずしいわ。（予想通り。“おもしろい”）
あゆみさんも（あわあそび）する？」



「ここは すずしいわ！」
（予想通り。“おもしろい！”）

タライをずんずん日陰
に運んで「よしっ！」



考 察

大好きな「庭あそび」も、季節によって感じる（学ぶ）ことが様々である。特に夏、水遊びの場となるこの“屋根付きの庭”は日が当たる場所とそうでない場所では体を感じる温度も随分と違う。それぞれに好きなあそびを見つけて取り組む中で、子どもたちは“日差しと影”や“日向と日陰”という対照的な自然現象に「なんで？」「こうしたら どうなるかな？」と心を動かせ、自分で確かめ、あそびにつなげていく。

この「なんで？」や「こうしたら どうなるかな？」という物事の見方や考える力は2歳児らしい発達の姿ではないだろうか。そして、この「なんで？」「こうしたら どうなるかな？」こそ、“おもしろい”の深まりであり、“科学する心”が育つ道筋だと考える。

ぶかぶか してるねー！（8月）（事例2）

今日はジュース屋さんになっていろいろな容器に水を入れて遊んでいる。そこへ容器の中にペットボトルのキャップを入れて「あゆみさーん、みてー！（キャップを）入れたの。」と A 児。

保育者に「あゆみさん、もーおって！」とキャップの入った容器を手渡し、ゼリーのカップに水を汲んで容器に入れていく。「りんごジュースですー。 あま〜い のジュースです！」楽しそうにおしゃべりしながら水を入れていく。（なにしているのかな？）というようにやってきた Sm 児。「Sm もてつだうわ」「Sm はオレンジジュースがすき！」 「A ちゃんも！」…



そんなやりとりをしている中、A児が「んっ？ あれっ？」
「あ〜っ！ ぷかぷか してるねー！」（“おもしろい”）

「んっ？ あれっ？」



水を入れる前は容器の底にあったペットボトルのキャップがゆらゆらと揺れながらどんどん上に上がってくる。

「ぷかぷか
してるねー」



Sm児に手伝ってもらって「うえまで いれるわ」と、満タンまで入ると「あ〜、うえまできたよー！」大喜びのA児。

「もーいっかい する！」

「こんどは、Aちゃんが（一人で）するわ！」と自分で水を容器の中に入れていく。

自分で…

自分で…

自分で…

自分でやりたい！

（2歳児の姿）



「Aちゃんも じぶんで
やってみる！」



「（ぷかぷか）してきた！」



「ぷかぷか するねー」

A児のまわりでは「おもしろそう！」と思った子どもたちが、それぞれ容器にキャップを入れ、水を注いでいく。最初、A児を手伝っていたSm児も“**自分でも**”確かめたくて「Smもしたいー」と容器の中に水を注いでいく。始めは容器の蓋に水を吸んで入れていたけれど、中々いっぱいにならない様子に「おそいな〜」と、近くにあったペットボトルをタライの水中に沈め、あっという間に水が入ったのを確かめ、容器に一気に入れ「あ〜っ ぷかぷかしたー」「ぷかぷか してるや〜ん！」と満足そうに眺めている。



容器の蓋からペットボトル
に変えて一気に水を入れ…
「ぷかぷか してるー！」

容器の蓋に水を入れて
「Smもしたい。
(容器を) もってて！」



これまでも色々な水あそびを十分に楽しみ、経験を重ねてきた子どもたち。その中で、水の感触やおもしろさとともに、どうしたら水をたくさん汲むことができるのかも理解したSm児は、“ペットボトル”という「道具」を選びタライの水中に沈めた（方法）。「たくさん」（量の概念）の水を汲むには大きな容器の方がいい（速く水を入れられる）」と自分で判断し、「ぷかぷか」あそびにいかしたのだ。

Sm児をはじめ、子どもたちはそれぞれ“自分がやりたいことを自分で確かめ遊ぶ”中で経験したこと、わかったことを積み重ね、活かしながら新たな“おもしろい”を見つけていく。

考 察

友達が楽しく遊んでいるのを見て、「自分も一緒に遊びたい、楽しみたい」と願い行動する2歳児らしい育ちがいろいろな場面で見られるようになってきた。

A児が見つけた「ぷかぷか」（ペットボトルのキャップが水を入れた容器の中で揺れ動く様子）は子どもたちにとって“不思議”で魅力的なものだったに違いない。その“不思議”（“**おもしろい**”）を他の子どもたちも同じように“**自分で**”やってみたい、確かめたい、楽しみたいと、思い（願い）がどんどん膨らんでいく。最初は保育士に手伝ってもらったA児も「今度は**自分で**する」と一人でこつこつと容器の中に水を入れていく。

大人から見れば単純な繰り返しのように見えるあそび。しかし、その繰り返し遊ぶ中には、“もっとうまく！”“もう一回やってみたい”等、「自分でもっとよくしたい、もっとおもしろくしたい」と、新たな“おもしろい”を求めていく姿（育ちゆく姿であり、「科学する心」そのもの）があると考えられる。

7. まとめ（課題と今後の取り組み）

小規模の保育所であり、“園”というより“おうち（家族）”のような関係の中で一人一人がほっこり安心して自分らしく生活できることを大事にしてきた。その安心の生活の中で、「子ども時代に過ごしてほしい“子どもらしい生活”」を作っていけるよう、保育士だけでなく、補助の職員や看護師、調理師も、全職員が同じ思いで保育にあたることを第一としている。そのためには子どもたちの姿から学び続けることが重要であり、園長、主任、研究主任が中心になって、すべての職員が研修できる時間を確保するように工夫している。

今回の実践論文をまとめるにあたって、一つ一つのエピソードを丁寧に見返り、まずは担当保育士がどのように子どもの姿を見取り、どのような願いをもって保育を進めているのか、また、そこには子どもたちのどのような思い（願い）や育ちが見られるのかについて話し合い、学び合う時間をもつことができた。それは、職員一人一人の保育観を高めるとともに、園全体の願い（子どもたちをどう育てたいのか、どう育ててほしいのか）を共有することにつながったと言える。

心地よい生活の中、安心できる大人を心の支えにして、周りの世界に「おもしろそう」と心を動かし自ら手を伸ばす0歳児。0歳児の事例『「あ〜〜!!」透明なカップ』では、自分が発見し

た“おもしろい”（「透明な空容器の底から見える世界」、「空容器の中で声を出したら響く」）を様々な場面で“自分で”何度も何度も確かめ、繰り返し楽しむ（科学する心）。そして、その“おもしろい”を担当保育士に見てほしくて笑いかける。（自分が見つけた“おもしろい”を大好きな担当保育士と共有したい。）

歩行も確立し、体も自由に使えるようになる1歳児は、なんでも“自分で”やりたい、試したい。事例1『雨の日の散歩』では雨の日のいつもと違う周りの様子に心が動き、次々に“自分で”“おもしろい”（水たまりの様子）を探していく（探索行動・科学する心）。また、事例2『だんごむし いない!!』でも、いつもの場所にいるはずのダンゴムシが雨上がりにはいないことに心が動き（不思議・“おもしろい”）、その後の散歩でもダンゴムシを探して公園の居そうな場所を想像して確認して歩く。この二つの事例から、“自分で”確かめ、関わり、行動する姿（科学する心）、そして、見つけた“おもしろい”を友達と共有する…1歳児らしい発達の姿がたくさん見られ、保育者自身も心が躍る。

走ったり飛んだり、身体運動が随分と発達し、会話も楽しめるようになる2歳児は、さらに周りの世界に積極的にかかわろうとするようになる。事例1『みてー！ でんしゃだよ』の子どもたちは日差しを受けてできたラティス柵の影を“でんしゃ（線路）”に見立て「あそび」を作り出す。ところが、もう一つの柵には“でんしゃ”がない。「なんで？」（不思議・“おもしろい”）と動き出す。（2歳児らしい姿）また、日向と日陰の違いを体で感じ遊び場所を移動するA児に、自然の不思議に出会い、自分の中に経験（日陰は涼しい）として取り込んでいく姿（自然と共存する術・科学する心）を感じる。事例2『ぷかぷか してるねー』でも、様々な水あそびを毎日繰り返し楽しむ中で、新たな“おもしろい”（水を入れるとぷかぷか揺れ動きながら上に浮いていく“キャップ”）と出会い、“自分で”確かめたいと行動する（科学する心）2歳児らしい発達の姿を子どもたちの中に見ることができた。

0歳児、1歳児、2歳児の「科学する心」は、これらの事例の中にあるように、子どもたちが周りの世界に心動く瞬間（“おもしろい”）に始まる。そして、この心動く瞬間を見逃さず、丁寧に寄り添い、見守り、適切な共感（大げさな、取り繕うような共感ではなく、子ども自身が見てほしい、認めてほしいと求めるそのときに心から共感すること）、そしてさらに“もっと、おもしろい”につながる環境や出来事に出会える“空間”・“時間”をどのようにつくっていくかを今後も全職員で協議し、実践につなげたいと切に思う。

さらに、この3歳未満児の生活・あそび（“おもしろい”との出会い）がその後の幼児期や学童期以降の“学び”（科学する心）のスタートラインであり、その先の“学び”につながる大変重要なものだ実感する。そして同時に、この時期は、今後、子どもたちが予想もつかない社会の中で生きていくために必要となる知識や思考力・行動力の土台となる力が育つ重要な時期だとも考える。その“人として大切な土台をつくる”0・1・2歳児の保育を担う園として、今後も、日々の子どもの姿や保育の記録（写真・映像など）を行い、子どもたち一人一人の「こうなりたい（もっと大きな自分になりたい）」という願いやその育ちを理解し、それをどのように支えていくか保育のあり方について定例研究会・職員会議を重ね、全職員で研究を深めることで保育実践の充実に継続して取り組んでいきたい。

保育園「にじのおうち」（実践・執筆者）

園長：吉川 恵子 主任：野瀬 知美 研究主任：（顧問）大橋 美智子

保育士：松田 有加・吉田 亜弓・上林 美里・木村 綾子

看護師：堀川 仁美